

土佐のわらべ

第347号 《第369回（2010. 4. 8） 子どもの本の読書会記録》 参加者6名

『白い紙』 シリン・ネザマフィ／作 文藝春秋

白い紙

1980年から始まったイランイラク戦争は、1988年に終わった。

この本はこの戦争が始まって4年目の話である。イラクとの国境迄車で二時間もかからない小さな田舎町。父が戦争医師として隣町の大きな病院に派遣されたので、私と母がテヘランから引越してきた。一教室は先生が不足していた為、80人の生徒が一部屋につめ込まれていた。その中に成績優秀なハサンがいた。彼の母が私の父の診察を受ける事で、二人は親しくなった。ある日、先生が「君達の今は白い紙のように真っ白だ。君達の人生は白い紙のようで、自分がそれに何を書くかで人生が変わる。」と言われた。この学校の大半の生徒達の職業と進路は前から決まっているのに、この先生は現実をわかっているのだろうか。

しかし、英雄の息子ハサンだけは医者になりたいという希望があり、それに向かっていたが、父が戦争で武器を置いて逃げたことで、恥をかいて生きるより、戦争に行った方がよいと思うようになった。

一朝9時、モスクの前で私が見たのは21台目に兵隊の濃い緑色の制服を着、目も表情も全て乾いているハサンだった。「神の為、国の為」と叫んで、彼らは視界から消えた。

何百人もの白い紙を乗せたまま。

サラム

（※降伏、救い、平和という意味をもつ。今はあいさつになっている。）

外国人の収容所である入国管理局で、アフガニスタン出身のレイラが難民認定を受ける為、若き田中弁護士、大学二年の私がタリ語の通訳をする事になった。レイラは読み書きが出来ない少女。難民支援のボランティアの団体が保証人となり仮釈放された。しかし、彼女の為、時間と努力を使い果たしていた田中先生、金子さん、又通訳以上の役割をしていた私だったが、裁判の結果は不認定であった。更に父の死で、元の無表情な目で、神経がすべて殺されている少女に戻った。

—そして別れは突然来た。レイラがアフガニスタンに帰るといふ。昔、彼女は母がタリバンに殺されるのを見ていた。「どんな事があってもサラムと言うべきだ。運命だから受け入れないといけない。」と母が言ったという。“母が私を呼んでいる”

田中先生が言うように、日本は冷たい国かもしれない。ディズニールランド帰りの幸せそうな家族は、私にはつらく思えた。

読書会に取り上げるのにふさわしく、文章的にも洗練されている。（読書会メンバーの声）

平和であり、未来があり、又、可能性がある日本の子ども達に、是非この本を読んで欲しいと思いました。

（シリンさんは、この本で文学界新人賞を受賞されました。）

(Y. A)